

■インフルエンザワクチン接種の目的

- ①インフルエンザの発症の予防
- ②発症した際重症化する可能性の高い人における重症化の予防
- ③感染拡大の予防

■インフルエンザワクチンの効果

①季節性インフルエンザワクチン

毎年冬に流行するインフルエンザに対するワクチンであり、専門科の予想の下毎年ワクチン株が決定されている。季節性インフルエンザではインフルエンザ関連死亡者の90%が60歳以上の高齢者であり、高齢者で重症化しやすいのが特徴。

○健康成人、健康小児における効果

インフルエンザ罹患、インフルエンザ様症状の発症が優位に減少する。成人では病院受診や、仕事の欠勤日数も減少するとの報告もある。

○高齢者（65歳以上の老人）における効果

インフルエンザ罹患率は低下しないが、インフルエンザ様症状の発症、肺炎の発症、さらにはインフルエンザと肺炎による入院および死亡率が優位に減少する。なお、年に1度のワクチン接種によって死亡率は更に低下する。

○医療施設での医療従事者のワクチン接種による効果（疾患の評価の対象は施設入所者）

医療施設内の医療従事者および患者がワクチンを接種した場合インフルエンザ様症状の発症は優位に減少するが、医療従事者がワクチン接種を行い患者が行わなかった場合、効果はない。

②新型インフルエンザワクチン

昨年平成21年に大流行したA型H1N1インフルエンザウィルスに対するワクチンである。新型インフルエンザの感染者・入院患者は10代以下が多く、入院患者の半数弱に基礎疾患を認める。

12歳～60歳では1回のワクチン接種で十分免疫を獲得できるが、それ以外の年齢では2回の接種によって初めて十分な免疫が得られると報告されている。新型インフルエンザ(A/H1N1)が流行し始めたのはごく最近のことであるため、ワクチン接種によって具体的にインフルエンザ罹患、発症やそれによる死亡率などがどう変化するかについては十分な臨床研究が未だなされていない状況である。

■平成22年度の日本のインフルエンザワクチン

今年度のワクチンには新型インフルエンザ(A/H1N1)と季節性インフルエンザ(A/H3N2とB型)の3つに効果のある3価ワクチンと新型インフルエンザ(A/H1N1)だけに効果のある1価ワクチンの2種類があるが、3価ワクチンの接種が広く行われる予定である。平成21年度では新型インフルエンザワクチンの数が十分に確保できていなかったため接種に優先順位が定められていた。優先順位は死亡者・重症患者の発生をできる限り減らし、またそのための医療を確保するという目的の下決定され、具体的には医療従事者、基礎疾患を有する者や妊婦、1歳～小学校低学年に相当する年齢の者などが優先された。しかし今年度はワクチンの数が十分あるので希望する者は誰でも接種が可能である。接種回数は13歳未満では2回、それ以外の年齢では1回の接種が推奨されている。

■参考文献

Up to Date ("Seasonal influenza vaccination in adults" Patricia L Hibbera, M.D., PhD)

The New England Journal of Medicine

- ・"A Novel Influenza A(H1N1) Vaccine in Various Age Groups" 2009;361:2414-23 Feng-Cai Zhu M.D. et. al
- ・"Effectiveness of Influenza Vaccine in the Community-Dwelling Elderly" 2007;357:1373-81 Kristin L Nichol M.D. et. al
- ・"Prevention and Treatment of Seasonal Influenza" 2008;359:2579-85 W. Paul Glezen, M.D.

厚生労働省 HP (http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou04/inful_vaccine22.html)

感染症診療のエビデンス (文光堂)